



Title	ディスカッサント発言3 : 日本から
Author(s)	村上, 陽子
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 39-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ディスカッション発言3：日本から

村上 陽子

はじめまして、沖縄国際大学から参りました村上陽子です。原爆文学と、沖縄の戦後文学を中心に研究しています。

金先生のご発表のなかで、ここ嶺南大学校が「予備戦場」というお話がありましたが、私の勤務する沖縄国際大学も「予備戦場」となっている場所の一つです。日本の南端の島嶼県である沖縄は、アジア・太平洋戦争終結直後から1972年まで米軍占領下に置かれていました。そして、日本に施政権が返還された後も日米安保体制によって沖縄には広大な在日米軍基地が存在しつづけています。沖縄国際大学は普天間飛行場に隣接しており、2004年8月、沖縄国際大学構内に米軍のヘリコプターCH-53Dが墜落するという大事故がありました。幸い、死者は出ませんでしたが、その後も状況は改善されることなく、現在私たちはオスプレイという米軍の巨大な垂直離着陸機が飛び回る下で日々の講義を行っています。異様な状況が沖縄の日常となっています。また、現在日米両政府は沖縄県民やそれに連帯する多くの人々の抗議を無視して沖縄本島北部の辺野古・高江への新しい米軍基地の建設を強行しています。

金先生のご発表を伺って、韓国の被爆者をめぐる問題と沖縄の被爆者をめぐる問題には大きな共通点があると思いました。沖縄の被爆者の問題も、韓国の被爆者をめぐる問題と同じように沖縄の人々にほとんど知られていません。また、さきほど申し上げた通り、1972年まで米軍占領下に置かれていた沖縄において、在沖被爆者の存在は不可視化されていました。沖縄の被爆者の実態調査が開始されたのは1963年のことでした。調査が開始されたときにすでに亡くなっていた被爆者も少なくはありません。また、日本本土の被爆者には適用されていた原爆医療法は、沖縄の被爆者には適用されませんでした。医療費の自己負担と貧困にあえいでいた沖縄の被爆者の闘いは、まず原爆医療法の適用を訴えることから始まりました。その成果として1966年には沖縄在住被爆者に対する原爆医療法の準用が認められ、「原爆被爆者健康手帳」の交付も開始されることになりました。

沖縄在住被爆者が注目されはじめる時期は、沖縄の人々が在沖米軍基地への核兵器持ち込みや原潜寄港にともなう被爆／被曝の不安を感じはじめる時期とも近接しています。沖縄の米軍基地に核兵器が配備されはじめたのは1953年でした。冷戦体制のなか、沖縄の米軍基地に配備される核兵器はその数を増やし続け、キューバ危機を迎える頃には1300発

の核兵器が沖縄にあったと言われていました。沖縄の人々は、核と隣り合わせに生きていることを感じつつ、「予備戦場」にその身体をさらしていたのです。

沖縄の被爆者を扱った文学作品も非常に数が少ないです。それも、沖縄の被爆者をめぐる文学は当事者によって書かれはじめたわけではなく、沖縄の被爆者たちの記録に触発されるかたちで非当事者が事後的に生成していったものがほとんどです。沖縄の被爆者という存在が見失われていた時間はあまりに長く、その間に個々人の体験や言葉は取り戻しようのないかたちで失われていきました。それでもなお残されたわずかな記録が、沖縄の被爆者をめぐる文学的想像力を刺激し、沖縄の被爆者をめぐる言説を生成してきたのだと言えます。それは、沖縄や韓国において原爆の問題があらためて見直され、ここから先の新しい文学が生まれるかもしれないという可能性を私たちに示してくれます。

最後に、金先生にご質問をさせていただきたいと思います。^{ヘンヌサン}韓水山の「軍艦島」については、軍艦島から脱出した人々の原爆体験が末尾に挿入されているということですが、被爆の後、「朝鮮人徴用者」の人々はどのようなかたちで過ごしていくのでしょうか。日本の原爆文学において、被爆前後の朝鮮の人々への差別が描かれることはしばしばありますが、被爆を生き延びた朝鮮の人々、とくに日本を離れて故国に帰った人々の「戦後」をきちんと描いた作品を寡聞にして知りません。作者が書こうとしたのは戦時下の問題であったのかもしれませんが、もし「戦後」への視座がこの作品に見いだせるのであれば、ぜひそれを伺いたいと思います。

^{コヒョク}高炯烈の「リトルボーイ」については、1995年に発表されたということですが、なぜこの時期に韓国においてこのような詩が書かれたのか、歴史的な文脈があればお教えいただければと思います。

私のコメントは以上です。どうぞよろしくお願いたします。